

エスファンド月の地中は揺れていたか？ (イラン観光ルートに見た変化)

中村明日香

要旨

2018年2月中旬、ノウルーズ(イランの新年である3月21日)の祝日を控えたイランを訪問した。テヘランからエスファハーン、ヤズド、シーラーズ、そしてタブリーズ市などの地方都市も視察した。エスファハーンやシーラーズ、ヤズドでは新たに観光施設が発展してきていた。また、アーゼルバイジャーン地方では、アルメニア教の建造物のような新たな観光資源の開発をしているところだった。観光ルートでどんな動きや変化がみられているのか、10年の時を経て現地をめぐった著者の観察を中心に報告する。

キーワード

イラン、観光、地方都市、アルメニア教会、変化

1. はじめに

2018年2月中旬、ノウルーズ(イランの新年である3月21日)を直前にしたイランを訪問した。イランでは、エスファンド月にあたるこの時期を、春に向かって植物が地下で芽吹く準備をしているような季節という意味で、「地が揺れている」と表現する。この時期のイランで目には見えないが、何か始まるような動きがみられたのか、観光ルートから観察した。

今回のルートは2部に分かれていた。1部はテヘランから、イラン高原中央の都市エスファハーンからヤズド、そしてシーラーズを訪ねる主要な観光ルートである。2部はイラン北西部に位置するアーゼルバイジャン州のタブリーズとアルメニア教の建築物等を訪れる比較的新しい観光ルートである。従って報告も2部構成となっている。



図1 イラン地図およびルート

2. 第1部（エスファハーンからヤズド、シーラーズへ）

2-1. エスファハーン

テヘランからエスファハーンへの約450キロは夜行バスを使った。テヘラン北部の Beyhaqī バスターミナルは、複数のバス会社が乗り入れており、多くの人が国内の主要都市に向かうバスを待っていた。運行会社のうち代表的な Seir-o Safar 社は、長距離バスのサービスで以前から定評があり、10年ほど前からテヘラン・イマーム・ホメイニー空港の空港タクシー運行も請け負っている。Seir-o Safar のマークをつけた大きな観光バスが定刻前に入ってきた。フロントガラス上部の電光掲示板にはペルシア語と英語で行き先と出発時間が表示されている。車内にはゆったりした座席がそれぞれ独立した3列に据え付けられ、Wi-Fiの接続も可能であった。他にも著者にとり新鮮だったのは、約5時間の道のりを、電話をしたり、パソコンのキーボードを叩いて過ごす一人の乗客の姿だった

エスファハーンはサファヴィー朝(1501-1736)の一時期、都がおかれた所である¹。イランには大きな川が少ないこともあり、町を流れる Zāyandeh Rūd(川)は、川にかかる Sī-ose pol(橋)との眺めが美しいことで、エスファハーンの人たちの自慢である。しかし、この時は上流のダムで、水がせき止められていた。イランでも近年、水不足が深刻である。しかし、町の人たちは水不足を懸念しながらも、「当局もエイド（ここではノウルーズの祝日のこと）になったら、旅行客のために水を流すだろう」と楽観的なのだ²。

世界遺産のイマーム広場では、外国人観光客が目立っていた。そして、広場の一面にあるイマーム・モスクの中庭には「フレンドリートーク」という真新しいコーナーが設けられていた。ここは、Nāserīyeh という神学校があった場所で、現在でも神学生の寮や講義のために使われているようだった。コーナーではイスラーム法学者が、車座になって観光客と話している。時間によって、英・仏・西語およびアラビア語で対応可能となっている。法学者は、イスラーム史上、指導的地位にいたわけだが、現代イランでもイスラーム共和体制下のエリートである。神学校を卒業し法学者となるには、厳しい勉強が課されている。その専門に加えて、このグローバル時代のエリートには、当然のように外国語も求められていくように思われた。



「フレンドリートーク」のコーナー（撮影：森本典子氏）

2-2. ヤズド

次に訪れたヤズドとシーラーズは、エスファハーンに続き、国際観光都市として生まれ変わろうとしていた。ヤズドはエスファハーンから東南に約 270 キロに位置している。ゾロアスター教の神殿や遺構もあり、歴史都市として世界遺産にも登録されている。国内外から観光客を受け入れる宿泊施設の整備が行われ、それらは以前の住民が去った後の旧市街に集中している。これらのホテルは、手入れのゆき届いた中庭を備え、その庭の四方を平屋の建物が囲むという伝統的イラン家屋を模倣した作りになっている。中庭には、テーブルや椅子を置き、昼間はレストランやチャイハーネとしても使う。外国人向けのものであるが、都市部ではこのような家屋は減少しており、国内の若い世代にも「新鮮な」伝統文化なのかもしれない。このような宿泊施設は、シーラーズの旧市街にも建設が進められていた。

ヤズドの宿泊スタッフは、同型の宿が何軒もできていて、ここもオーナーが資金援助を受けて作ったのだと言っていた。「良かったら、トリップアドバイザーにレビューしてくれよ」と念を押された。ここでも集客はガイドブックより、旅行ウェブサイトでの評価で決まるようになっていた。

ヤズド周辺の史跡も観光名所となっている。Kharānaq の村は、カージャール朝期(1796-1925)のモスクが修復中であり、他は手つかずの状態だった。しかし、観光客はすでに訪れるようになっており、崩れそうな土壁の住居跡を迷いながら歩いて楽しんでた。やはりヤズド近郊でサーサーン朝期からの城跡が発見されている Meybod では、歴史的建造物の修復はほぼ終わっており、町自体も拡大の段階に入っているのだった。

2-3. シーラーズ

ヤズドからシーラーズは、幹線道路で約 440 キロの道のりがある。そのルートに位置するペルセポリスやパサルガダエ、Naqsh-e Rostam など、アケメネス朝やサーサーン朝の遺跡を周ると 12 時間ほどかかる。この行路を、テヘラン出身でヤズド在住のドライバーが、嫌な顔一つせず運転してくれた。遺跡はどこも観光客でにぎわっていたが、アケメネス朝のキュロス 2 世の墓とされるパサルガダエは、雨が降る広い遺構の中を、少人数の観光客が歩いているだけだった³。

シーラーズでも道路や建物、地下鉄の整備のため、大規模な建設工事が行われていた。ここではまた、通りすがりに気軽に声をかけてくる女子学生が多かった。好奇心の強い女性は以前から存在したが、今はスマートフォンを構えて「一緒に写真を撮ってくれる？」と聞いてくる。SNS に投稿するらしい。休日の金曜日、元気な高校生たちに囲まれた。「どこから来たの?」「何でイランに来たの?」など、英語で矢継ぎ早に質問を重ねる。実技練習のために街頭に来たという英会話スクールの生徒たちなのだった。「そんなにたくさん質問したらかわいそう」、「もっとゆっくりしゃべってあげて」、「あなた声が大き過ぎ」などといさめ合っている。外国人相手でも、気遣いを忘れないところもイラン人らしい。イブン・バットゥータによって、「善行に勤しむ清廉な人たち」で「奇異な習わしがある」とも評されたシーラーズの女性を見たような気がした⁴。かの大旅行家は、女性（にもかかわらず）たちがモスクに集って説教師の講話に聞きいっているのを珍しく見たのだが、著者には、少女たちの好奇心の裏の向学心や希望の表れと映った。観光地かつまた大都市として発展していくシーラーズで、外国語の能力は鍵となっていくだろう。かつて、イスラーム学に向けられた向学心は健在であるが、現在はより実学的方向に向いているのかもしれない。



シーラーズにて英会話スクールの学生たちと（森本典子氏提供）

2-4. テヘラン

テヘランにおいては、2箇所の新名所を訪れた。tabī'at 橋は、イランの女性建築家の設計による歩道橋である⁵。橋そのものが名所になっていて、夕方ともなれば散歩好きな人で毎日混雑している。Bām Land は、広い敷地内に中東で人気のブランド店や、多くのレストランやカフェがあり、バンドの生演奏なども楽しめる大規模な商業施設である。Chītgar 湖という人工湖のほとりにあるため、眺望だけでも美しく、ピクニックに来ている家族連れも多かった。このテヘラン 22 区は市内中心部へは距離があるものの、湖周辺はすでに何棟もの高層マンションが建っていた。新たな巨大ショッピングモールの建設計画もあり、市内の不動産が高騰するなか人気の居住区になっているという。

テヘラン市の地下鉄は順次延伸していて、すっかりテヘラン市民の足となっている。以前と比較して、タクシーを使う必要が少なくなった。それでもタクシーを使うときには、Snapp という配車サービスアプリが定着してきている。Snapp はイラン版の Uber(ウーバー)であるが、ペルシア語の他に英語でも対応しており、テヘラン在住の外国人にも使われている。これまでは、āzhāns と呼ばれるテレフォントクシーで、高額な料金をとられることもあった。Snapp のサービスが定着したのは、スマートフォンの普及と、外国人だけでなくイラン人も āzhāns に不便さを感じていたことの表れだろう。しかし、Snapp の人気は、āzhāns のドライバーたちの厳しい状況の裏返しでもある。āzhāns は、これまで、仕事のない期間の職や、低賃金労働を強いられている人たちのダブルワークの職場も提供してきた。Snapp のドライバーたちは、スマートフォン・アプリや SNS など、IT を使いこなす世代の若者である。ならばドライバーの労働市場から浮いた労働力はどこへ向かうのだろうか。

2-5. 考察

2017 年 5 月の大統領選挙で過半数の票を獲得し、二期目を迎えたロウハーニー大統領だったが、2018 年 3 月のこの時期すでに内憂外患が絶えないようだった。一期目の 2015 年のイラン核合意(イランと国連安全保障理事会及びドイツ(P5+1)による「包括的共同行動計画 (Joint Comprehensive Plan of Action, JCPOA)」の締結)は大きな功績となったものの、その後 2016 年 12 月に米国議会が、イラン制裁法の 10 年間延長を議決したことで、制裁解除とそれによる経済復興を切望していたイラン国民を失望させた。議会も保守強硬派が多数であり(大統領は保守穏健派)、政権への風当たりは厳しい。2017 年選挙公約として、同大統領は「(失業対策として) 400 万の職業を設ける」と言っていたが、これも未だ果たされない⁶。さらに、2017 年 6 月、国会とイマーム・ホメイニー廟を標的にした IS が関

連したとされるテロ事件が起こった。2018年初頭からは、北東部の宗教都市マシュハドで生活必需品の値上がりに業を煮やした人々が、政府に対して抗議デモをしたことからイラン全土での反政府デモに発展した⁷。

シリアの内戦に関して、2011年の内戦勃発当初は、イランは軍事的関与を公表していなかったが、今では、この隣国の内戦におけるイラン人戦死者たちの遺影が「殉教者」として国中に掲げられている。2015年からのイエメン内戦への関与は、サウジアラビアとイランの関係改善がはかられない限り、終わりの見えない状況である。今回出会った人々の中にも、「政府はまず国内の経済的状況の悪化を食い止めるべきだ、もはやシリアやパレスチナの支援に金を使うどころではない」と言い切る人がいた。

トランプ政権成立後からは、米国のJCPOAからの離脱、イスラエルからの圧力の増加、改善の糸口が見いだせそうだった西側諸国との関係も予測がつかなくなっている。

ところで、イランは「イスラーム革命の輸出」には熱心であったが、意外にも宣教にはそれほど積極的でない。それは、非ムスリムを強制して改宗させてはならない、もしその人の運命ならイスラームを信じざるを得ないときがくる、と考えるからだ。だから、「フレンドリートーク」も、現在のところは、観光立国を目指す上で外国人が多く入国するならば、少しでも12イマーム派の教義に親しみをもってもらい、イランの「友人」を作ろうという草の根的な試みに見える。

国際的孤立の状況にあっても観光立国を目指す（今回は実際に中国からの観光客で混雑していた）、厳しい経済状況下にあっても海外に劣らない商業施設をつくって国民生活を活性化する、など、試行錯誤な動きは観光や芸術、関連経済において何かの変化をもたらすかもしれない。

イランは、元来豊富な遺跡や歴史的建造物と広い国土に多様に展開する自然に恵まれている。イラン人のホスピタリティやサービス精神も旺盛である。絨毯をはじめとする華麗な伝統工芸品などもあり、魅力的な観光資源を備えている。国を疲弊させたイラン・イラク戦争から30年、「革命の輸出」以外によやく力をそそぐ余裕ができつつあるのかもしれない。

3. 第2部（タブリーズ、Mākū から Jolfā、そしてテヘランへ）

3-1. イランにおけるマイノリティ

イスラーム共和制を標榜するイランにあって、キリスト教徒は少数派である。2016年統計によると、総人口約7992万人のうち、キリスト教徒は13万人ほどであり、人口に占める割合は0.3%となっている⁸。キリスト教で主流を占めるのは

アルメニア教会と言われるが⁹、公式な数は発表されていない。ここで言うアルメニア教会とは、正式には「アルメニア使徒教会(Armenian Apostolic Church)」のことである。この地に使徒タダイとバルトロマイが直接伝道を行ったとされるので、教会の名に「使徒」が挿入されている¹⁰。後に現れた「啓発者グレゴリー(Gregory the Illuminator)」は、301年にアルメニア王トリダテス3世を改宗させ、さらに彼をしてキリスト教を国教化させる働きをし、アルメニア使徒教会の守護聖人となった。アルメニア教徒は、イスラーム以前からアルメニア王国の影響下にあった地域(歴史的アルメニア)に居住してきたのであり、現在のイラン国内でいえばそれは北西部の現在の Khōy や Jolfā、Orūmīyeh の辺りということになる。

イランのマイノリティ分類は、宗教によるカテゴリーだけではない、言語及び民族の分類もある。イランにおける言語的最大マイノリティは、トルコ語系の Āzarī である¹¹。Āzarī は半数以上を占めると言われる Fārsī (「ファールス語」または「ファールスの人」の意味) の対義語として使われる。地域的にみれば、アゼルバイジャン共和国との国境近くの東西アゼルバイジャン州で、Āzarī を話す人が多数派であるが、テヘランなど大都市部では両者は混在している。Āzarī の次に、クルド系、ロル系、アラブ系、バルーチーなどとなっている。

3-2. タブリーズ

最初に向かったタブリーズは、テヘランから約 600 キロ離れている。現在は東アゼルバイジャン州の州都であり、Āzarī の中心地でもある¹²。イスラーム協力機構(OIC; Organization of Islamic Conference) の「2018 年イスラーム観光模範都市(the Capital of Islamic Countries Tourism for 2018)」に選定された¹³。これを記念して広告したり、市や市内の観光名所の新しいパンフレットを発行したり、また空港にはトヨタの新車を揃えた空港タクシーを整備していた。

ノウルーズを控えて、タブリーズのバーザール(これも世界遺産登録されている)は活気に満ちていた。著者は、Āzarī が絶対的多数派のこの町において、以前と比べ Fārsī を話しても違和感がなくなっているのを感じた。

3-3. アルメニア教会の修道院跡

タブリーズから長距離バスに乗り、北西部に向かうと、車窓にはイラン高原の乾燥した大地とは異なった、緑の大地が広がる。西アゼルバイジャン州に入り、トルコとの国境にもほど近い Mākū という小さな町に入った。ここは Āzarī のコミュニティだが、まれに来訪する外国人に大変親切である。ここで、イラン・アルメニア修道院建造物群(The Armenian Monastic Ensembles of Iran)に立ち寄りつつ、Jolfā までのアラス河畔の道約 200 キロを走ってくれるドライバーに出会えた。

アラス河畔は、現在平穏な国境となっている。対岸のアゼルバイジャン共和国側に、羊の群れが草をはんでいるのが見え、のどかな風景を作っていた。

2008年に世界遺産に登録された「アルメニア修道院建造物群」は、聖タデウス(St. Thaddeus)修道院¹⁴、ゾルゾル(Dzordzor)礼拝堂、聖ステファノ(St. Stepanos)修道院の3つである。いずれも、イラン文化遺産・伝統工芸・観光庁の管理下であり、観光庁の被雇用者である施設の職員(ムスリム)がガイドをしてくれた。彼らはまだ訪れる人もまばらなこの異教の遺跡がどれほどの価値があるのか、訝しんでいる様子でもあった。25年前に初めてペルセポリスを訪れた時、ちょうどこんな具合だったことが思い起こされた。ここも数年後には観光客でにぎわうようになるのだろうと予想された。



アラス川(対岸にアゼルバイジャン共和国の家屋が見える)



ダム湖のほとりに建つゾルゾル礼拝堂

3-4. Jolfā

エスファハーンにアルメニア教徒が居住するようになったのは、1605年、サファヴィー朝(1501-1736)のアッバース1世(1571-1629)の命令によって、Jolfāから強制移住させられたからだった¹⁵。当時のJolfāはアルメニア教徒の職人の町および商人の貿易拠点だった。

現在Jolfāは、アゼルバイジャン共和国と国境を接していることから、近隣のKalibarの町と共にアラス自由経済特区(Aras Free Zone)を形成している。アゼルバイジャン共和国やトルコを経由してもたらされるヨーロッパやロシア製の商品の販売・仲買をする店が並んでいて貿易中継地点となっている。トルコ側からは、安いイラン産の青果や米を買い付けに来る商人も多いということだった。

3-5. 再びテヘラン

第二部の旅も、実はテヘランから始まっていた。中央部に位置するSarkīs教会

の周辺にはアルメニア教徒が経営している店が多く、「アルメニア人地区」と呼ばれる区画がいくつか存在する。ここでアルメニア教徒は、彼らが慣習的に飲むコーヒー（ムスリムのイラン人は慣習的に紅茶を飲む）やその豆を提供するカフェの他に、文房具や雑貨、衣服などの商店を経営している。それらの店はテヘランの大バーザール（テヘランや近隣の町にある商店の間屋を兼ねている）では見つからない外国製のしゃれた商品を多く扱っていて、ムスリムの若者たちにも人気がある。

イランに入国した翌日には、その付近にある聖ジョゼフ・アッシリア・カトリック教会を訪ねていた。以前にも同志社大学からの訪問者を迎えていた司教は、日曜礼拝への出席を快く承知してくれた。金曜日が休日であるイランで、日曜の午前中に行われる礼拝に参加できる教会メンバーは数名である。代わりに、外国人の学生や旅行者が加わっていた。この日、司教は我々のために説教の一部を英訳してくれた。「この苦しい日々において、それでもあなた方は自己犠牲を払いなさい、そうして平和と神の意志を追求しなければならない」という、力強いメッセージだった。礼拝後、地下のサロンへお茶に招かれた。サロンは、100人は収容でき、結婚式なども催されるという。この時、大バーザールの中に月に一度だけ礼拝を行う教会に関する情報提供を受けていた。

全旅程を終えて、テヘランに戻り、月の第一金曜日にあたる礼拝日に、「バーザールの中の」アルメニア教会（「聖タデウスと聖バルトロマイ(St. Thaddeus and St. Bartholomew)教会」）に何とかたどり着くことができた。流暢な英語を操るアルメニア教徒の女性が迎えてくれた。この小さな教会は、1808年に、アルメニア教徒の商人一族によって建てられた。彼らの祖先は、エスファハーンのジョルファー地区のガラス職人だったが、カージャール朝のファトフ・アリー・シャーの時代(1797-1834)に Golestān 王宮を飾るスタンドグラスを作るため、都テヘランに連れて来られたのだそうだ。この教会はまた、ほとんどキリスト教徒がいなかった時代にテヘランで亡くなり、葬られたキリスト教徒の墓を兼ねていた。墓石にはロシア人やイギリス人の名前も記されている。墓石を案内した後、彼女は、庭に転がった太いロープを指して、先日この教会に空き巣が入ったとき、犯人たちが残していったものだと話した。月に一度しか使われない教会なら盗みも容易に考えられたのだろう。周囲は大バーザールでも、衣服や食品などの住民向けの店舗と住居が混在するローカルな地区であり、治安が良いとは言えない。

キリスト教徒がマイノリティとして、この国で制限された立場にいるのは事実だろう。しかし、その制限下で逞しく生きているのも間違いなかった。彼らの生き方を支えているのがキリスト教とすれば、これもキリスト教の一つのあり様なのかもしれない。

聖タデウスと聖バルトロマイ教会に司教がやってきて、皆で祈りを捧げた。この礼拝は、テヘランでのアルメニア教徒の礎と、異邦人として亡くなったキリスト教徒を思い起こすために守られてきた。だから、この小さな教会がアクセスの悪い所になっても、この祈りは続くのだらうと思われた。

注

- ¹ エスファハーンの人口は、約 154 万人でテヘラン、マシュハドに次ぐ第 3。
- ² ノウルーズの祝日期間は、毎年、イラン全土からエスファハーンに旅行者が押し寄せる。エスファハーン市民たちの希望的観測は覆され、ノウルーズの祝日(3 月 21 日から通常 2 週間)にも放流はなかったことが、2018 年 4 月 1 日の Mehr 通信に掲載された、(<https://www.mehrnews.com/news/4261347/%D9%86%D8%A7%D8%B1%D8%B6%D8%A7%DB%8C%D8%AA%DB%8C-%DB%B1%DB%B0-%D8%AF%D8%B1%D8%B5%D8%AF%DB%8C-%D9%85%D8%B3%D8%A7%D9%81%D8%B1%D8%A7%D9%86-%D9%86%D9%88%D8%B1%D9%88%D8%B2%DB%8C-%D8%A7%D8%B5%D9%81%D9%87%D8%A7%D9%86-%D8%A7%D8%B2-%D8%AE%D8%B4%DA%A9%DB%8C-%D8%B2%D8%A7%DB%8C%D9%86%D8%AF%D9%87-%D8%B1%D9%88%D8%AF>)。
- ³ 10 月 29 日は、紀元前 539 年にアケメネス朝のキュロス 2 世がバビロンに入城した日とされており、イランでは近年非公式ではあるが、「キュロスの日(rüz-e kūrūsh)」として知られてきた。2016 年 10 月 29 日の「キュロスの日」は、パサルガダエで SNS で集まった人々の大規模な集会が開かれた。この時若者たちは「キュロスは我らの父、イランは我らの祖国」というあまりイスラーム的でないシュプレヒコールをあげていた。BBC はこの集会への参加者が撮影・投稿した動画を伝えた(<http://www.bbc.com/persian/interactivity-37805667>)。集会活動が制限されているイランでは、翌年 2017 年の 10 月 29 日、地元の当局から人々にパサルガダエに集まらないよう呼びかけがあり、当日はパサルガダエが閉鎖され公安警察の車両で囲まれている様子が報道されていた(<http://www.bbc.com/persian/iran-41782490>)。
- ⁴ イブン・バットゥータ著・イブン・ジュザイイ編・家島彦一訳『大旅行記 2』、1997 年、平凡社、p. 319。14 世紀の歴史家・旅行家イブン・バットゥータは、ハッジ(マッカへの巡礼)の後、イラクを経てファールスを訪れた。当時のエスファハーンとシーラーズの様子が生き活きと表現されている。シーラーズで彼は、千人を超える女性たちが週 3 日もモスクに集い、講話を聞くのを、「奇異な習わしを持って」いて、これほどの規模で女性が集会するのを「いずれの国においても・・・見たことがなかった」としている。
- ⁵ Leilā Araghīān の設計。複数階構造と曲線を描く金属製のパイプが何本も重なったスタイリッシュなデザイン、そして夜のライトアップで人気が出る。
- ⁶ 2017 年秋の失業率は 11.9%、同年冬には 12.1%に上昇した、A Selection of Labor Force Survey Results- Winter, the Year 1396 (22 December 2017 – 20 March 2018), 2018, Tehran, Statistical Centre of Iran, p. 5. (https://www.amar.org.ir/Portals/1/releases/LFS_Winter_1396.pdf)
- ⁷ 2018 年 1 月 18 日 Washington Post 報道、(https://www.washingtonpost.com/news/worldviews/wp/2018/01/03/tens-of-thousands-of-people-protested-in-iran-this-week-heres-why/?noredirect=on&utm_term=.a440f3010d0a)。しかし、このデモも年明けに沈静化されたという報道がされていた、<https://edition.cnn.com/2018/01/03/asia/iran-protests-government-intl/index.html>

-
- ⁸ *Selected Findings of the 2016 National Population and Housing, Census*, Statistical Center of Iran, 2018, Tehran, pp. 20-21.
(https://www.amar.org.ir/Portals/1/census/2016/Census_2016_Selected_Findings.pdf)
- ⁹ <http://worldpopulationreview.com/countries/iran-population/>.
- ¹⁰ アルメニア使徒教会の説明によれば、両使徒は、多くの人々を改宗させた後、この地方で殉教したという。<https://www.armenianchurch.org/index.jsp?&lng=en>.
- ¹¹ 一説によると、比率は全人口の 16%、
<https://www.worldatlas.com/articles/largest-ethnic-groups-in-iran.html>.
- ¹² タブリーズは、紀元前から人が居住していたことが考古学的発掘によって確認されており、1265 年から一時期イルハーン朝(1256-1336)の都がおかれた。その後も、カラコユンル(黒羊)朝(1375-1468)、アクコユンル(白羊)朝(1468-1501)の時代に都がおかれ、1501 年から 1555 年にはサファヴィー朝の都ともなっていた。
- ¹³ “Resolution on Tourism Development Among the OIC Member States adopted by The 9th Session of the Islamic Conference of Tourist Ministers (ICTM)”, Republic of Niger, 2015.
(https://www.oic-oci.org/page/?p_id=71&p_ref=40&lan=en)
「イスラーム観光模範都市」とは、ムスリムの観光客たちが、旅行先で快適に過ごせるよう、ハラールの食事や礼拝場所・時間などに配慮して環境が整備された都市である。
- ¹⁴ 聖タデウス修道院は、年 1 度夏の数日間だけアルメニア教徒たちの巡礼地としての役割を復活する。
- ¹⁵ この時、アルメニア教徒が移住した地区がエスファハーンのジョルファー地区となった。当時の Jolfā の高度な技は、エスファハーンの Vānk 教会の展示物からも知ることができる。Vānk 教会は、教会は、いまもアルメニア教徒たちの手で管理されており、ムスリムへの宗教伝道が厳しく禁止されているイランにあって、国民が誰でも気軽に訪れ、異教徒の歴史や文化を知ることができる数少ないキリスト教の建造物になっている。
Jolfā は、「織る人」の意味。タブリーズから北西に約 135 キロの距離にある。町の北側をアラス川が流れ、ナヒチェヴァン自治共和国、アルメニア共和国との国境になっている。